感想

谷本潔昭*

*medical topics**Looking back of the Congress*
Kiyooki Tanimoto*

第3回日本炎症学会は、昭和57年7月16、17の両日、聖マリアンナ医大水島裕先生会長のもと、東京において盛大に行われた。元来、炎症学（そういうものがあれば）は、微生物学、免疫学、血液学、病理学、薬理学などの接点にあるとも考えられるもので、そのカバーする領域の広い反面、上記のそれぞれの分野においては、やや本流を離れた範疇に入ってしまうという点は否めなかった。したがって炎症学会が発足し、着実に成長しつつあることは、喜ばしいことであり、また当然のことともいえよう。現在の炎症学には、二つの大きなテーマがあると考えられよう。

一つは、炎症の mediator, および cell biology で、炎症発現の根本にせまるものである。他の一つは、前者ともちろん密接な関連があるわけだが、抗炎症ということである。それらの点からみても、二つのシンポジウム、および各ワークショップは適切に配分されており、会長の苦心のあとがうかがえた。

特別講演も、炎症の cell biology の権威である Schiffmann, Weissmann 両博士の講演は、最近のデータを豊富に盛り込んだ内容の多いもので、非常に啓発的なものであった。

さて、小生は、ワークショップ“炎症と免疫”の総会司会の重責を、東北大学の京極教授と分担させていただいた。急性炎症が発現した場合、その終息あるいは慢性化には、免疫細胞の関与が十分考えられ、多くの研究がなされているが、その結果はかなり複雑で、今後の追究が必要な分野である。本ワークショップにおいても、炎症から免疫への増幅因子、および抑制因子の両者が、複雑にからみあっていることが明らかになり、特に実験系を単純化した今後の検索が待たれるとの印象を得た。一方、小生は一貫して、いわゆる自己免疫疾患における免疫異常の追究をしてきたが、これら病態の多くはやはり炎症であって、免疫異常が primary で、その結果としての炎症であるのか、その逆に、あるいは両者が共存するのか、いまだ不明であるが重要なポイントである。そういう点で、RA における軟骨の電顕による興味ある知見が2題だされ、今後、両者の結果の間のダイナミズムが、明らかにされれば、きわめて興味深いものと考えられよう。

最後に、本学会の性格上、致しかたないことではある

が、他学会ですでに発表された内容の演題が多くみられたような印象を受けたが今後の本学会の発展のためにも、オリジナリティーの高い研究が寄せられることを望みたいと考える。

* Department of Physical Therapy, Faculty of Medicine, University of Tokyo 東京大学医学部
物療内科学教室